江戸・東京における新四国霊場

－「御府内八十八ヶ所霊場」の札所分布－

玉　井　建　三

1、はじめに

わが国における巡礼は、「順打ち」といって、各札所寺院を順番通りに巡り最終の札所寺院で結願する形態をとっているのが一般的である。キリスト教徒やイスラム教徒の巡礼が遠隔地の聖地への旅で、日本のような複数聖地を順番に巡る形態とは異なる。また、金刀比羅参宮とか善光寺参拝など、特定の聖地を巡る場合は「参詣」と呼ぶのが一般的である。つまり、田中智彦が指摘しているようにキリスト・イスラム教徒の聖地への旅を「巡礼」ととらえるのは、わが国の「参詣」にあたる概念[1]である。

わが国における代表的巡礼には、「四国八十八ヶ所霊場」「西国三十三ヶ所霊場」「坂東三十三ヶ所霊場」「秩父三十四ヶ所霊場」などがある。「四国八十八ヶ所霊場」の巡礼においては、札所を比較的順番通りに巡拝する場合とか、途中の札所番号から順に巡る場合、あるいは「逆打ち」といって88番から逆に巡る場合などがみられるが、基本は順番通りの巡礼である。

この「四国八十八ヶ所霊場」に対して、それを全国各地に移植した写しが、いわゆるミニチュア版「新四国霊場[2]」である。当然のごとく、このミニチュア版は写しであるから、その多くが札所番号順に巡拝する場合が多いが、本稿で考察する「御府内八十八ヶ所霊場」については、巡拝の道順と札所番号が一致していない。むしろ、開設当初から、その点に関しては配慮がなされていなかったようにも思える。

「御府内八十八ヶ所霊場」の札所番号１番から88番までの順番が、どのような要因で設定されたのか、この点については容易に解明できないが、江戸城の拡張工事、江戸の災害、明治の廃仏毀釈運動（神仏分離令）などの影響によって、その順番が崩れたのか。それとも前述のごとく「巡拝の道順と札所番号」の関係は開設当初から認められないのか。それを探り考察するのが本稿の主たる目的である。

ところで、江戸・東京は諸国で育まれた多様な文化を基盤に、平面の広がりをもたせた首都であるから、地方の文化を踏み台にして成長させてきたといっても過言ではない。本稿では、その観点から江戸開府400年の大東京を考察しようとする、筆者の研究の一部でもある。

2、「新四国霊場」の概要

「四国八十八ヶ所霊場」を模したミニチュア版「弘法大師八十八ヶ所霊場」は全国各地に分布している。それぞれの地域で「新四国霊場」とか「島四国霊場」などと呼ばれ、地域名を冠して「○○八十八ヶ所霊場」と呼称される場合が多い写しである。

こうした写しには10日間程度で巡拝可能なものから、寺院の境内に八十八仏を順に設けたものや、本堂内に巡拝仏を集め数分で巡拝できるものまで認められる。この写しを巡ることによって、四国の遍路旅に出ずとも同等のご利益が求められる場合や、四国を巡拝したいという欲求を駆り立たせる場合など様々である。

「新四国霊場」は全国で291も確認[3]できる。この数は「新西国三十三観音霊場」の463に次いで多い。関東地方では、40[4]（山梨県含）を超えるという。また中世のころから開設されている「新西国三十三観音霊場」に対して、「新四国霊場」の開設は遅く、江戸後期以降である。こうした点について、新城常三が「新四国霊場」は「新西国三十三観音霊場」よりも信仰的関心が希薄であったことを言及しながら、「新四国霊場」は「限られた地域の中に、弘法大師にゆかり深い八十八ヶ寺の真言寺院を選ぶことは容易でない。」ことを指摘し、更に「真言以外の寺院や単なる堂宇等を加え[5]」なければならない困難さがあった点を述べている。

札所の所在地という点で、東京都に１札所以上が所在する「新四国霊場」だけでも「関東八十八ヶ所霊場」（平成７年開設）、「相武甲八十八ヶ所霊場」（文政６年

1823開設)、「玉川八十八ヶ所霊場」、「多摩八十八ヶ所霊場」、「奥多摩八十八ヶ所霊場」(昭和9年開設)、「御府内八十八ヶ所霊場」(宝暦5年　1755開設)、「豊島八十八ヶ所霊場」(明治34年開設)、「荒川辺八十八ヶ所霊場」(天保9年以前開設)、「南葛八十八ヶ所霊場」(大正期開設)など、徒歩で数日を要する霊場[6]がある。

また高幡不動尊(日野市)の境内「山内八十八ヶ所霊場」のように1・2時間で巡拝できるものや、練馬区の三宝寺のように、「御府内八十八ヶ所霊場」の16番札所と「豊島八十八ヶ所霊場」の16番札所を兼ねていながら、境内老木の下には札所を示す石碑が八十八基設けられ、数十分程度で巡拝できる「四国八十八ヶ所お砂踏場」もある。

更に川崎大師(川崎市)境内や板橋区安養寺境内のような四国の各霊場から砂土を持ち帰り直径10メートル程度に順に設けたもの。国分寺薬師堂裏(国分寺市)に八十八体の石仏を並べたものや、世田谷区の玉川大師[7]のように本堂地下に八十八仏を配したものまである。

このように、大規模霊場から小規模霊場まで、その霊場写しを数えると40程度ではなく、それよりも多く開設されているように思える。つまり東京都全域というか旧武蔵国域で、霊場自体が重層構造をなしながら開設されているのである。

本稿で考察しようとする「御府内八十八ヶ所霊場」はその内のひとつで、主に札所が東京23区内(主に江戸の朱引内)に分布する霊場である。

「御府内八十八ヶ所霊場」の開設については、『御府内八十八ヶ所大意』版木[8]に「宝暦5年3月下総葛飾郡松戸宿諦信(たいしん)の子出家して信州浅間山真楽寺の住になりぬ両人本願して江戸に霊場をうつす御府内ハ四ヶ領なれば四国の国になぞろふゆへに高祖の返礼霊地を写」(版木第三丁)と記されていて、この宝暦5年(1755)が開設年とみられる。

3、江戸の都市計画と寺院の移転

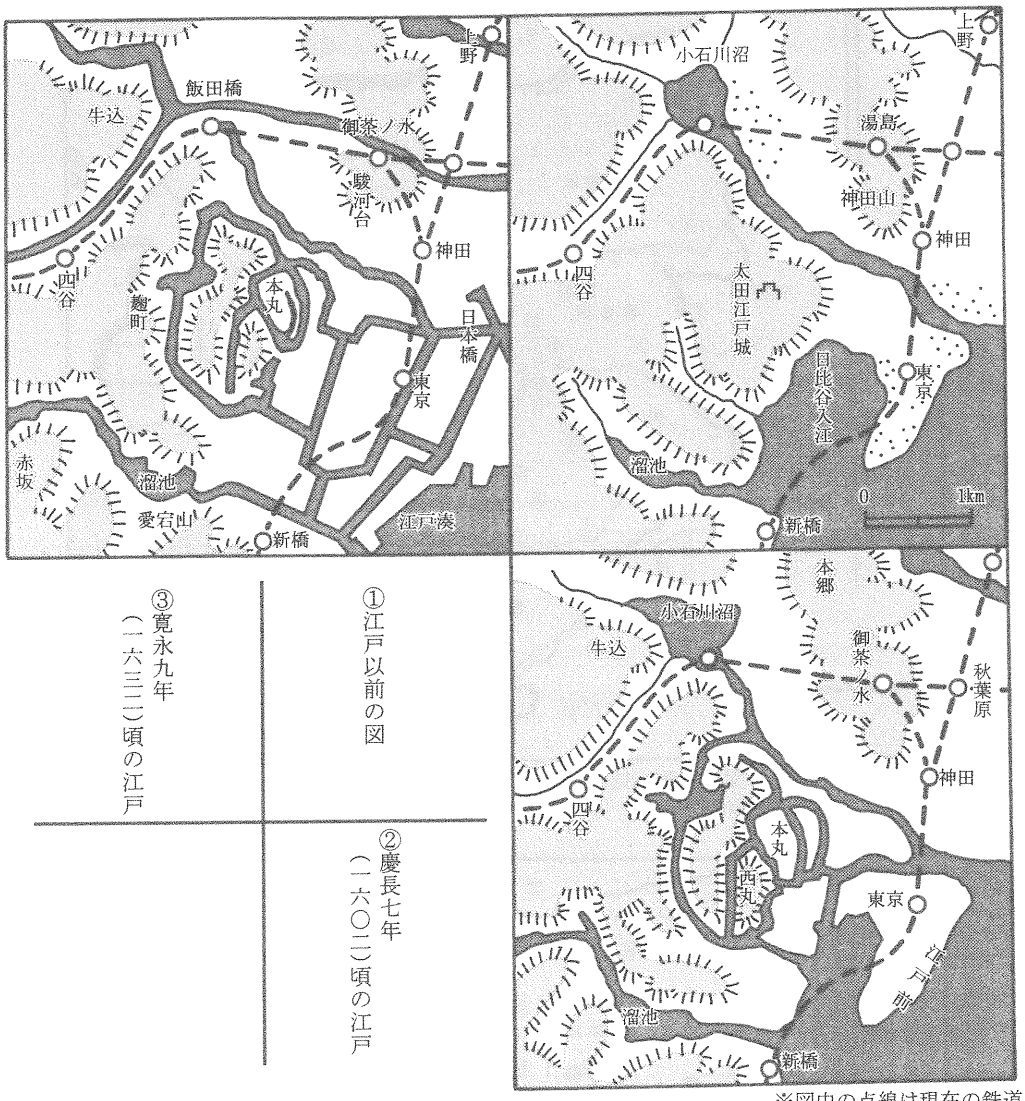
徳川家康が江戸へ入府したのは、天正18年(1590)8月1日であった。当時は本丸だけの城で、東国ということもあってか、畿内の諸城には及ばなかったし、城下の家並みも八重洲の河岸と麹町あたりにそまつな民家がわずかにあったほどで、城下町のたたずまいというよりも、のどかな田園風景そのものであったという。江戸は上方とちがって、草木の生い茂る武蔵野に農家が点在する、まったくの野であった。

家康が入城するとまもなく、諸大名に命じて、本丸、二の丸、三の丸、西の丸、西の丸下、北の丸などの館や濠の石積み整備をおこなっている。また江戸城の度重なる修築工事の普請を命じられた諸国の大名たちも多く、三大将軍家光の寛永の大造築が終わる頃にはそのほとんどが完成した(図1)。

つまり江戸は、慶長8年(1603)になって、城の前面を修築する工事がなされている。いわゆる江戸前と呼ばれる場所で、大川(現在の隅田川)より西で、江戸城(現皇居)より東にあたるところを埋め立て、三百町におよぶ市街地を設けた。寛永11年(1634)、諸大名の妻子が江戸に居を構えるようになると、旗本などと同様に、邸地の割り渡しをおこない、武家地が拡大した。その拡大とともに、武士を顧客にする商いが盛んになって、町人、職人たちも増加していく。かくて、天正18年(1590)の入府から、寛永11年(1634)にいたる45年を経て、江戸は大都会の体裁を見せるに至った。

ところが、その後も天下普請は続けられたようで、伊予諸藩の普請をみても、松山藩・寛永16年(1639)8月16日本丸修復手伝い、寛文5年(1665)2月23日西の丸普請助役、元禄7年(1694)9月23日西の丸普請、安政6年(1859)12月27日本丸普請、今治藩・寛永16年(1639)本丸修復手伝い、天保5年(1834)9月12日二の丸修復普請手伝い、大洲藩・慶長18年(1613)江戸城普請、慶長19年(1614)濠普請、寛永12年(1635)惣郭の改修、宝永元年(1704)石垣普請手伝い、嘉永6年(1853)西の丸普請助役、宇和島藩・万治2年(1659)江戸城普請助役、享保4年(1719)城内溜池浚渫助役[9]などがある。手伝いとか助役と命じられているものの、事実は普請の分担で、諸大名が、すべての労力資材を提供して完成したのであった。

この御府内における寺院の開創については、日塔和彦[10]の「『御府内寺社備考』からみた江戸の寺院」によれば、971寺院の立地年代を①徳川家康が天正18年(1590)に江戸へ入部する以前、②家康の入部から寛永8年(1631)までの41年間、③寛永9年(1632)から寛文3年(1663)までの32年間、④寛文3年以降に区分をして、それぞれ①110、②517、③67、④39、不明238寺院の立地となっているが、なかでも真言宗寺院の立地は少なく80寺院(内②が29寺院)である。このように少ない真言宗系寺院数であれば、「御府内八十八ヶ所霊場」の88ヶ寺を



※図中の点線は現在の鉄道

図１　江戸城下町の拡大

表１　主な江戸の大火

発　生　年	大火の名称	備　　考
1657年（明暦３年１月18日）	明暦大火（振袖火事）	死者10万人以上。寺社350余と江戸城天守閣焼失。
1682年（天和２年12月28日）	お七火事	死者約３千５百人。駒込大円寺から出火。本郷・神田・日本橋・本所延焼。寺社95焼失。
1689年（元禄11年９月６日）	勅額火事	新橋から出火。上野寛永寺根本中堂焼失。
1703年（元禄16年11月29日）	水戸様火事	小石川水戸藩邸から出火。武家屋敷200焼失。本郷・下谷・浅草方面延焼。
1717年（享保２年１月７日）	小石川火事	小石川武家屋敷から出火。江戸の70％焼失。
1772年（明和９年２月29日）	目黒行人坂火事	死者約２万人。大円寺より出火。寺社382焼失。江戸城・日本橋・下谷・本郷・千住まで延焼。
1794年（寛政６年１月20日）	桜田火事	麹町（酒屋）から出火。浅草まで延焼。
1806年（文化３年３月４日）	車町・牛町火事	死者1万人以上。芝から出火。浅草まで延焼。
1829年（文政12年３月21日）	佐久間町火事	死者約３千人。神田佐久間町から出火。下谷・浅草方面延焼。武家屋敷93、町屋113835焼失。
1855年（安政２年10月２日）	安政地震火事	死者約７千人。マグニチュード7.0～7.1

山本純美著（1995）『江戸・東京の地震と火事』等により作成。

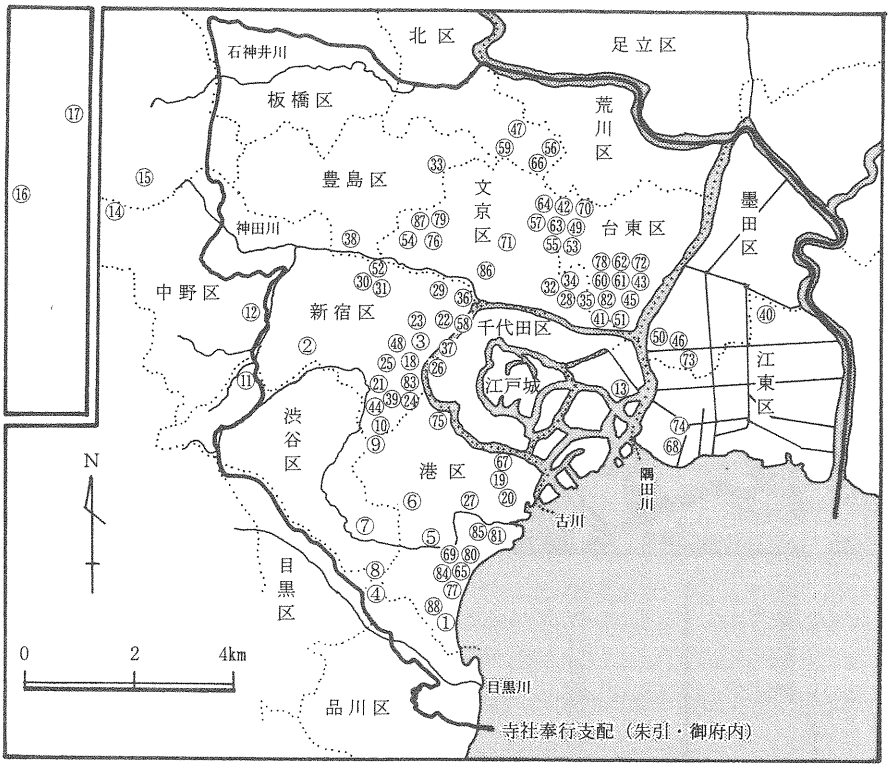


図２　文化13年（1816）の「御府内八十八ヶ所霊場」分布図
※図中番号は札所番号、「御府内八十八ヶ所大意」（文化13年）より作成

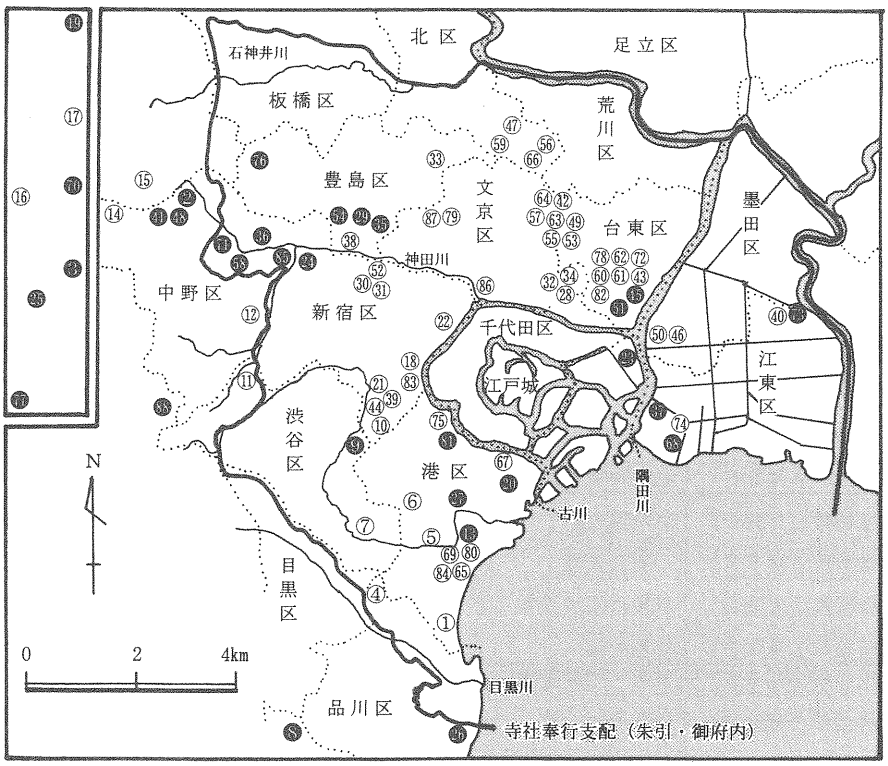


図３　現在の「御府内八十八ヶ所霊場」分布図
※図中番号は札所番号、白抜き数字は文化13年から現在までに移動した札所

選出するのは、星野英紀[11]が指摘するように選定の根拠が容易に解明できないし、また新城常三[12]が指摘する他宗派の寺院や堂宇を選出しなければならない理由があったようにも思える。

次に寺町の成立についてであるが、まず江戸城外郭が家康の入府から寛永11年（1634）にいたる45年を経て整備されていった。つまり外堀普請や埋め立てなど、大都会の体裁を見せる江戸城拡張工事によって、江戸城外郭内の神田北寺町、神田山、京橋八丁堀、清水谷・麹町などに寺院が集中していたが、明暦大火（表１）によって江戸市街の大半を焼失したことが契機となって、寺院は再び郊外へ移転を余儀なくされた。

寺院の移転は主に、神田北寺町の寺院が浅草、谷中、深川などへ、神田山の寺院が小石川、本郷などへ、京橋八丁堀の寺院が三田、浅草、深川などへ、そして清水谷・麹町の寺院が牛込、四谷、赤坂などに移転している。明暦の大火以前に作図した内容に、大火直後の都市改造によって、様々な情報を盛り込み追記されたとする『明暦江戸大絵図[13]』によっても、寺院の焼失と寺町への移転が確認できる。これらの寺町は防災による移転や治安維持による起立によって造成されたものであるが、明治以降も、時代が降りるにしたがって、更に郊外へと移転している。

「御府内八十八ヶ所霊場」の札所寺院も前述の影響をうけて、郊外への移転を余儀なくされた。しかし、宝暦５年（1755）が開設年である「御府内八十八ヶ所霊場」においては、江戸初期の天下普請や江戸大火などが、その寺院の開創・移転に直接関係があったとしても、札所開設時期においては連関が薄い。そこで、御府内札所がどのように移転開設されたのか、更に御府内札所を巡る札所番号が「四国八十八ヶ所霊場」のように、開設当初には１番から88番まで順番通りに設定されていたのか、それとも当初から順番通りに設定されていなかったのか、次に考察する。

４、「御府内八十八ヶ所霊場」札所の分布と移転

慶応元年（1865）まで、つまり江戸時代の「御府内八十八ヶ所霊場」札所寺院の分布は、表２の「御府内八十八ヶ所霊場」一覧表のような分布であるが、寺院の移転に関しては次のような変遷があった。

寺院の移転と札所の開設（1755年）について、前述の神田北寺町、神田山、京橋八丁堀、清水谷・麹町から郊外の、主に浅草、谷中、四谷、三田などへ移転した札所は次のような寺院である。まず浅草への移転は43番成就院（八丁堀から移転）、45番観蔵院（神田お玉ヶ池）、51番延命院（明暦大火による）、62番威光院（八丁堀）、72番不動院（同）、78番成就院（神田北寺町）などの札所である。谷中への移転[14]は42番観音寺（神田北寺町）、49番多宝院（同）53番自性院（同）、55番長久院（同）、57番明王院（同）、63番観智院（同）、64番加納院（同）などである。

四谷方面への移転は18番愛染院、21番東福院、39番真成院、83番蓮乗院などが、寛永11年（1634）江戸城外堀普請のため、半蔵門や麹町辺りからの移転で、44番顕性寺の場合は清水谷からの移転である。58番光徳院のように慶長年間（1596～1615）に麹町に開創されたが、天下普請、江戸大火などによって市ヶ谷田町（寛永年間）へ移転し、更に牛込柳町へ、そして明治43年（1910）になると再び郊外の中野区上高田へと、約300年間に三度も移転を繰り返した札所もある。

一方港区の三田方面への移転では、65番大聖院、69番宝生院、80番長延寺、84番明王院などが、寛永12年（1635）江戸城拡張工事により京橋八丁堀を武家屋敷や町屋に土地の利用を変更するため三田寺町へ。また同じ港区への移転でも、６番不動院は万治元年（1658）御用地として召し上げのため、麹町から六本木へ移転した札所である。

この他、本所・深川への移転（46番弥勒寺、37番萬徳院、74番法乗院）や本郷（34番三念寺）、田端（66番東覚寺）・豊島区高田（35番根生院）・中野区沼袋（41番密蔵院）・中野区江古田（２番東福寺）など、江戸城拡張の影響をうけてより郊外へ移転しているケースもある。上記札所の移転は「御府内八十八ヶ所霊場」の開設以前（宝暦５年　1755年以前）の寺院移転経歴である。

「御府内八十八ヶ所霊場」の札所開設は宝暦５年であるが、しかし「御府内八十八ヶ所霊場」の一覧表（表２）に記したように、最も古い資料でも文化13年（1816）までしか遡れない。霊場成立年の宝暦５年から文化13年までの61年間の札所に関する経緯とその状況は不明である。この点に関して表１の「主な江戸の大火」によると、札所の成立した宝暦５年（1755）以後においても、幾多の大火に見舞われている。札所成立後の大火とすれば17年後に起こった行人坂火事（明和９年　1772）がある。382寺社が焼失したこの大火において、

表２　「御府内八十八ヶ所霊場」一覧表

札所番号	『御府内八十八ヶ所大意』文化13年（1816）当時の寺院名と所在地	文化13年の所在地に開創又は移転した年（空白は不明）	『御府内八十八ヶ所道しるべ』慶応元年（1865）当時の寺院名と所在地	現在の寺院名と所在地	文化13年から現在までに札所の変更又は移動
1	高野寺　芝二本ゑのき	延宝元年（1673）	高野寺　芝二本ゑのき	高野山東京別院　港区高輪３丁目	
2	二尊院　大くぼぬけ弁天		二尊院　大久保坂上	東福寺　中野区江古田３丁目	●
3	多聞院　四ツ谷しん町	寛永５年（1628）	多聞院　四ツ谷通り新町	多聞院　世田谷区北烏山４丁目	◎
4	高福院　めぐろ行人坂	寛永年間(1624～44)	高福院　目黒永峯町	高福院　品川区上大崎２丁目	
5	延命院　あざぶ本むらみなミまち		延命院　あざぶ本村南町	延命院　港区南麻布３丁目	
6	不動院　あざぶ六けん町	万治元年（1658）	不動院　麻布市兵衛町	不動院　港区六本木３丁目	
7	室泉寺　しもしぶやむら	元禄14年（1701）	室泉寺　下しぶや村	室泉寺　渋谷区東３丁目	
8	光雲寺　目ぐろ六けんぢや屋		光雲寺　目黒六けん茶屋町	長遠寺　大田区南馬込５丁目	●
9	浄性院　青山はら宿　熊野別当		浄性院　青山久保町	龍巌寺　渋谷区神宮前２丁目	●
10	聖輪寺　千駄がや	神亀３年（726）	聖輪寺　千駄が谷町	聖輪寺　渋谷区千駄ケ谷１丁目	
11	荘厳寺　はたが村ふどう別当	永禄４年（1561）	荘厳寺　幡ヶ谷	荘厳寺　渋谷区本町２丁目	
12	宝仙寺　なかのむら	永享元年（1429）	宝仙寺　四ツ谷通り中野村	宝仙寺　中野区中央２丁目	
13	円覚寺　れいがん嶋白銀町一丁め		円覚寺　れいがんじま白銀町	龍生院　港区三田２丁目	●
14	福蔵院　のがた領さぎの宮	文亀・永正年間(1501～20)	福蔵院　在方鷺之宮村	福蔵院　中野区白鷺１丁目	
15	南蔵院　豊島郡四ツやざいなか村		南蔵院　雑司ヶ谷通在中村	南蔵院　練馬区中村１丁目	
16	三宝寺　野がた領しゃくじ	応永元年（1394）	三宝寺　石神井	三宝院　練馬区石神井１丁目	
17	長命寺　やはら村	慶長18年（1613）	長命寺　やはら村	長命寺　練馬区高野台３丁目	
18	愛染院　四ツや南寺町	寛永11年（1634）	愛染院　四ツ谷南寺町	愛染院　新宿区若葉２丁目	
19	円福寺　あたご山別当		円福寺　芝愛宕山別当所	青蓮寺　板橋区成増４丁目	●
20	金剛院　あたご本地どう		金剛院　愛宕山下本地堂	鏡照院　港区西新橋３丁目	●
21	東福院　四ツや南寺町	寛永11年（1634）	東福院　四ツ谷南寺町	東福院　新宿区若葉２丁目	
22	南蔵院　牛込おたんすまち	延宝９年（1681）	南蔵院　牛込御たんす町	南蔵院　新宿区箪笥町	
23	薬王寺　市ヶや川だがくぼ		薬王寺　市か谷川田ケ久保	薬研堀不動院　中央区東日本橋２丁目	●
24	三光院　四ツ谷新宿いなり		三光院　内藤新宿上裏通り	最勝寺　新宿区上落合３丁目	●
25	和光院　四ツ谷北寺町		和光院　四ツ谷北寺町	長楽寺　日野市程ケ久保	●
26	文殊院　四ツ谷南寺町		文殊院　四ツ谷南寺町	来福寺　品川区東大井３丁目	●
27	円明院　芝赤ばねばし		円明院　芝赤羽いなり	正光院　港区元麻布３丁目	●
28	霊雲寺　湯しま大根ばたけ	元禄4年（1691）	霊雲寺　ゆしま大根ばたけ	霊雲寺　文京区湯島２丁目	
29	千手院　牛ごミ七けん寺町		千手院　牛込新寺町	南蔵院　豊島区高田１丁目	●
30	放生会寺　たかたあなはちまん	寛永18年（1641）	放生会寺　高田八まん	放生寺　新宿区西早稲田２丁目	
31	多聞院　牛ごミ七けん寺町	天正年間(1573～92)	多聞院　牛込七軒寺町	多聞院　新宿区弁天町	
32	円満寺　湯しま四丁め	宝永7年（1710）	円満寺　ゆしま四丁目	円満寺　文京区湯島１丁目	
33	真性寺　すがも	元和元年(1615)以前	真性寺　すがも中下町	真性寺　豊島区巣鴨３丁目	
34	三念寺　本郷御弓町	慶長８年（1603）	三念寺　本郷元町	三念寺　文京区本郷２丁目	
35	根生院　湯嶋切通		根生院　湯島切通し上	根生院　豊島区高田１丁目	◎
36	報恩寺　牛ごミねころまち		報恩寺　牛込根来町	薬王院　新宿区下落合４丁目	●
37	東円寺　市ヶ谷八まん		東円寺　市か谷八幡宮	万徳院　江東区永代２丁目	●
38	金乗院　高たすがたみ橋	文禄３年(1594)以前	金乗院　砂り場	金乗院　豊島区高田２丁目	
39	真成院　四ツ谷南でら町	慶長３年（1598）	真成院　四ツ谷南寺町	真成院　新宿区若葉２丁目	
40	普門院　かめ井ど	元和２年（1616）	普門院　本所亀戸天神先	普門院　江東区亀戸３丁目	
41	密蔵院　浅草新寺町	正保元年（1644）	密蔵院　浅草新寺町	密蔵院　中野区沼袋２丁目	◎
42	観音寺　谷中なか門ぜん	延宝８年（1680）	観音寺　谷中なか門前町	観音寺　台東区谷中５丁目	
43	成就院　浅草寺町本通り	万治年間(1658～60)	成就院　浅草寺町本通り	成就院　台東区元浅草４丁目	
44	顕性寺　四ツ谷南寺まち	承応２年(1653)以前	顕性寺　四ツ谷南寺町	顕性寺　新宿区須賀町	
45	大護院　御蔵まい八まん		大護院　浅草御蔵前八幡	観蔵院　台東区元浅草３丁目	●

札所番号	『御府内八十八ヶ所大意』文化13年（1816）当時の寺院名と所在地	文化13年の所在地に開創又は移転した年（空白は不明）	『御府内八十八ヶ所道しるべ』慶応元年（1865）当時の寺院名と所在地	現在の寺院名と所在地	文化13年から現在までに札所の変更又は移動
46	弥勒寺　本所二ツめはやし町	元禄２年（1689）	弥勒寺　本所二ツ目林町	弥勒寺　墨田区立川１丁目	
47	城官寺　かみなかざと村平塚別当	江戸初期以前	城官寺　上中里村平塚別当	城官寺　北区上中里１丁目	
48	林松院　市ヶ谷ふくろ町		林松院　市か谷袋町	禅定院　中野区沼袋２丁目	●
49	多宝院　谷中門そと	慶安元年（1648）	多宝院　谷中門外	多宝院　台東区谷中６丁目	
50	大徳院　本所一ツめ元まち	貞享２年（1685）	大徳院　御宮別当本所一ツ目元町角	大徳院　墨田区両国２丁目	
51	長楽寺　鳥越明神別当		長楽寺　浅草鳥越明神	延命院　台東区元浅草４丁目	●
52	観音寺　下戸塚村	寛文13年（1673）	観音寺　下戸塚村	観音寺　新宿区西早稲田１丁目	
53	自性院　やなか	慶安元年（1648）	自性院　谷中寺町	自性院　台東区谷中６丁目	
54	新長谷寺　めじろふどふ		新長谷寺　関口駒井町目しろ	新長谷寺　豊島区高田２丁目	◎
55	長久院　やなか	慶安元年（1648）	長久院　谷中寺町	長久院　台東区谷中６丁目	
56	与楽寺　たばた六阿ミだ	江戸初期以前	与楽寺　田ばた村	与楽寺　北区田端１丁目	
57	明王院　やなか三さき	万治元年（1660）	明王院　谷中三さき町	明王院　台東区谷中５丁目	
58	光徳院　いちがや柳町	寛永以後	光徳院　市か谷柳町	光徳院　中野区上高田５丁目	◎
59	無量寺　にしがはら六阿ミだ	鎌倉期以前	無量寺　西ヶ原村	無量寺　北区西ヶ原１丁目	
60	吉祥院　あさくさしん寺町	寛永21年（1644）	吉祥院　浅草新寺町	吉祥院　台東区元浅草２丁目	
61	正福院　あさくさ柳いなり	正保元年（1644）	正福院　浅草新寺町	正福院　台東区元浅草４丁目	
62	威光院　あさくさしんぼりばた	明暦大火以後	威光院　浅草新堀端	威光院　台東区寿２丁目	
63	観智院　谷中三さきどをり	慶安元年(1648)以後	観智院　谷中三崎通り	観智院　台東区谷中５丁目	
64	加納院　やなか	延宝８年（1680）	加納院　谷中	加納院　台東区谷中５丁目	
65	大聖院　芝ミた寺まち	寛永12年（1635）	大聖院　芝三田寺町	大聖院　港区三田４丁目	
66	東覚寺　たばた八まん	慶長初年	東覚寺　田ばた村	東覚寺　北区田端２丁目	
67	真福寺　あたご下	慶長10年（1605）	真福寺　あたご下	真福寺　港区愛宕１丁目	
68	永代寺　ふか川八まん	寛永４年(1627)以後	永代寺　深川仲町八幡社	永代寺　江東区富岡１丁目	●
69	宝生院　芝ミた寺まち	寛永12年（1635）	宝生院　芝三田寺町	宝生院　港区三田４丁目	
70	西光寺　やなか		西光寺　谷中	禅定院　練馬区石神井５丁目	●
71	玄性院　小石川金すぎいなり		玄性院　小石川金杉水道町	梅照院　中野区新井５丁目	●
72	不動院　あさくさ八けん寺町	寛永12年（1535）	不動院　浅草森下八軒寺町	不動院　台東区寿２丁目	
73	覚王寺　本所さるへ町		覚王寺　本所猿江町きぐら	東覚寺　江東区亀戸４丁目	●
74	法乗院　ふかがわ八けん寺町	寛永18年（1641）	法乗院　深川八けん寺町ゑんま堂ばし	法乗院　江東区深川２丁目	
75	威徳寺　あか坂一つぎ	慶長５年（1600）	威徳寺　赤坂一ツ木町	威徳寺　港区赤坂４丁目	
76	西蔵院　をとは八丁め		西蔵院　音羽八丁目東がハ	金剛院　豊島区長崎１丁目	●
77	仏乗院　三田寺町	延宝年間(1673～80)	仏乗院　芝三田寺町	仏乗院　神奈川県秦野市蓑毛	◎
78	成就院　下谷わらだな	慶安元年（1648）	成就院　下谷わら店	成就院　台東区東上野３丁目	
79	専教院　小石かわだいまち	延宝９年（1681）	専教院　小日向台町	専教院　文京区小日向３丁目	
80	長延寺　しば三た寺まち	寛永12年（1635）	長延寺　芝三田寺町	長延寺　港区三田４丁目	
81	真蔵院　芝ミた南中寺まち		真蔵寺　芝三田三軒寺町	光蔵院　港区赤坂７丁目	●
82	龍福院　浅草阿べ川かた町	宝永７年（1710）	龍福院　浅草新寺町	龍福院　台東区元浅草３丁目	
83	蓮乗院　四ツ谷南寺まち	慶長16年（1611）	蓮乗院　四ツ谷南寺町	蓮乗院　新宿区若葉２丁目	
84	明王院　しば三た北中寺まち	寛永12年（1635）	明王院　芝三田中寺町	明王院　港区三田４丁目	
85	泉福院　三田だいうら町		泉福院　三田台裏町	観音寺　新宿区高田馬場３丁目	●
86	常泉院　小石かわ七けん町	寛永４年（1627）	常泉院　小石川七軒町	常泉院　文京区春日１丁目	
87	護国寺　おとはまち	天和元年（1681）	護国寺　音羽壱丁目	護国寺　文京区大塚５丁目	
88	高野寺　しろかねだい町	元禄９年（1696）	高野寺　しろがね台町	文殊院　杉並区和泉４丁目	◎

注１：文化13年から現在までに寺院が変更又は合併となった札所●
注２：文化13年から現在までに移動した札所◎
出典：『御府内八十八ヶ所大意』『御府内八十八ヶ所道しるべ』『大江戸めぐり御府内八十八ヶ所』『寺院名鑑』『江戸・東京のなかの伊予』『江戸東京寺社名集覧』等により作成。

札所寺院の変更・移転がみられたのか、これも不明である。ただ文化13年よりも後に起きた安政地震火事(安政２年　1855）による被災後の状況を表１でみると、浅草、下谷、本所、深川などが延焼していながら、文化13年から慶応元年までの49年間においては札所寺院の変更・移転は認められない[15]。

こうした点を考慮すると、霊場開設当初から文化13年までにおいても頻繁に札所寺院の変更・移転があったとは考えにくい。換言すると、札所の１番から88番という番号設定に関しては容易に解明できないが、開設当初から順番通りの巡拝道ではなかったように思える。むしろ１番から88番までを順序よく巡るとすれば、極端に効率が悪くなるのである。

本四国の「四国八十八ヶ所霊場」が、江戸の庶民に紹介されるようになったのは、『四国偏礼霊場記』が編まれた元禄２年（1689）のころといわれ、著者である高野山の僧、雲石堂寂本が「八十八番の次第いずれの世、誰の人が定めあへる、さだかならず。今はその番次によらず。[16]」と記しているように、本四国霊場でさえ、当時は札所の順番が決定していなかったことがわかる。それが宝暦５年（1755）、御府内に霊場の写しが開設される場合においても、影響を与えたものと考えられる。この札所番号と順路の連関を、次に資料吟味する。

5、「御府内八十八ヶ所霊場」の札所順路

「御府内八十八ヶ所霊場」の札所順路が記されている最も古い資料が、表３の「御府内八十八ヶ所大意」である。順番通りに整備されていない、この札所番号の配置は前述の江戸大火による寺院焼失（表１の目黒行人坂火事以降）がみられたにも関わらず表２の慶応元年以前において札所変更・移転がみられなかった。また、文政５年（1822）に十返舎一九が著した『金草鞋　第十五編』の序に「辺礼の次第一二の順番に拘らず、其道順よきを記す、故に順逆混雑す、たとへば第一番高野寺より、第二番二尊院へ行くは、札所の順なれども、道に悉く損あるゆゑ、一番より八十五番、泉福院へ参詣すべし道順よし、余皆これに准じあらはす[17]」と、文政の時期においても、順番通りではなかった。このように、大火によって被災したとしても変化がみられなかったことから、開設当初においてもこの順路に比較的類似した配置だったように考えられる。

この点について、「篠栗新四国霊場」（福岡県篠栗町）で、中山和久が「四ヶ村内に順番通り配置する構想もあったが、既に多くの札所が順不同のまま配当されており、祭祀願主としても希望の札所本尊を護持したい気持が強く、合祀を解消するためにも順序不同はやむを得ないことになった[18]」と、順番通りに整備できなかった経緯を論じているように、「新四国霊場」のなかには開設当初から順番の配慮がなされないケースも存在していたのである。

「四国八十八ヶ所霊場」においても、順路が固定するのは江戸時代中期、正徳年間（1711～16）以降で、それまでは「必ずしも一番から順番に廻るのではなく、四国に渡った場所に応じて適宜に巡拝を始めている[19]」。この札所番号と順路が成立時とその後において変更されるのは「巡拝する人々の便宜で順路が変更された可能性が高い[20]。」ことを佐藤久光が指摘している。また武田明は「阿波へ上陸して、第一番を阿波の霊山寺としたのは熊野信仰や高野聖の影響による[21]」が「九州や中国地方から来た者は、伊予・讃岐の港に上陸すると最寄りの札所に行き、そこから思い思いに順打ち・逆打ちのコースをたどる[22]」ことを論述している。「御府内八十八ヶ所霊場」の場合、整備された「四国八十八ヶ所霊場」の札所番号と順路の関係とは異なり、むしろ順番通り整備できなかった「篠栗新四国霊場」に類似しているように思われる。

江戸時代における「御府内八十八ヶ所霊場」においては、順不同のまま札所寺院の変更・移転が認められなかったのに対して、明治維新以降になると、その変更・移転が著しい。表４の「御府内八十八ヶ所道順獨

表３　文化13年(1816)の「御府内八十八ヶ所霊場」巡拝道

①→㉟→㉑→㉞→㉗→㉕→㉙→㉚→㉗→⑲→⑳→㉗→⑬→㉔→㉘→㉓→㊵→㊻→㊿→㊶→㊺→㉒→㉒→
㊸→㉑→㉒→㊶→㊵→㉘→㊾→㊺→㊺→㉚→㉓→㊼→㉔→㊷→㊻→㊾→㊼→㉝→㉟→㉘→㉜→㉞→
㊻→㉑→㉙→㊼→㉖→㊹→㊷→㉚→㊽→⑮→⑰→⑯→⑭→⑫→⑪→③→㉔→②→㊱→㉙→㉛→㉒→㊽→
㊽→㉓→㊼→㉕→㉑→⑱→㉓→㊴→㉖→㊹→⑩→⑨→㉕→⑥→⑤→⑦→④→⑧→㊽

『御府内八十八ヶ所大意』により作成。

表４　明治９年（1876）の「御府内八十八ヶ所霊場」巡拝道

1→88（旧寺院）→81（旧寺院）→84→77○→65→69→80→20●→67→13（旧寺院）→74→68（吉祥院）→73→40→46→50→72→62→43→61→51●→82→41○→45●→60→19（清光院）→78→49→53→55→63→57→64→42→56→66→47→59→33→35○→28→32→34→86→87→79→54○→52→30→38→85●→24●→36●→76●→2●→15→17→70●→16→14→71●→12→11→25●→3◎→23（旧寺院）→48（旧寺院）→58○→31→29（旧寺院）→22→37（千福寺）→21→18→83→39→44→10→9●→75→6→27●→5→7→4→8●→26●

『御府内八十八ヶ所道順獨案内』『地方図特集(4)』（江戸町名俚俗研究会）『御府内八十八ヶ所道しるべ』等により作成。

凡 例
●：慶応元年（1865）から明治９年までに新寺院へ変更した札所
○：文化13年からの寺院に所在する札所
◎：現在の所在地に移動した札所
88（旧寺院）：文化13年の寺院が受け継ぐ札所
68（吉祥院）：文化13年の札所や現在の札所と異なる寺院が受け継ぐ札所

案内」（明治９年　1876）と慶応元年の寺院一覧（表２）を比較すると、札所寺院の変更が15ヶ寺（20、51、45、85、24、36、76、2、70、71、25、9、27、8、26）、札所寺院は変更しないが移転したのが１ヶ寺（3）である。さらに文化13年当時の札所寺院と異なっていて、現在の札所寺院とも異なる寺院が受け継ぐ札所が68（吉祥院）、19（清光院）、37（千福寺）の３ヶ寺存在する。明治初期の僅か11年間に合計19ヶ寺もの札所寺院が変動している。表３と表４の順路を比較しても、浅草、谷中、四谷、三田など札所寺院が密集する寺町において巡拝道にやや変化[23]がみられるが、それ以外はこの19ヶ寺が新たに加わることによる変化である。

上記の19ヶ寺の変動寺院とは異なり、文化13年当時の札所が明治９年になっても、まだその所在地に存在するが、その後移転した寺院が５ヶ寺（77、41、35、54、58）、明治９年当時は現在の寺院に札所が変更していないで、まだ文化13年に記されている旧寺院に所在する６ヶ寺（88、81、13、23、48、29）を[24]合わせた11ヶ寺よりも多い。

このように、明治初期の11年という短期間のうちに19ヶ寺もの寺院変動（全体の22パーセント）がみられることは、神仏分離令（廃仏毀釈）の影響がその背景にあったものと考えられる。勿論その後は関東大震災や昭和の戦災などの影響をうけて廃寺（寺院変更）と移転を繰り返してもいる。

それについては、例えば「御府内八十八ヶ所霊場」一覧表（表２）の「文化13年から現在までに札所の変動又は移転」欄に記した（●印◎印）ように31ヶ寺存在しており、また図２と図３から、札所寺院の変更・移転をみても31ヶ寺で、そのすべての札所寺院が明治以降の変更・移転であることが理解できる。この31ヶ寺を含めて、その後の震災、戦災などによって焼失・被災した札所寺院[25]は全寺院の84パーセント（74ヶ寺）にも達しているのである。

６、結　語

江戸時代後期、モデル霊場である「四国八十八ヶ所霊場」に対して、地方巡礼である「新四国霊場」が全国各地に開設されてきた。しかし、この新四国霊場のなかには、消滅した場合や、また復活する場合など盛衰の激しい霊場もあった。

本稿で考察してきた霊場は、江戸から東京へ継承されてきた大都会の「新四国霊場」である。開設から今日までの約250年間に、江戸の大火や災害、神仏分離令、関東大震災、昭和の戦災などをくぐり抜けたこの霊場が、札所寺院の廃寺、寺院変更、移転などを繰り返しながら、どのような巡拝道で維持してきたのか考察した。

特に、途絶えることなく受け継がれてきた新四国霊場「御府内八十八ヶ所霊場」の札所寺院の分布と変遷を中心に論じてきたが、この霊場は１番から88番まで順番通りに配置されていたのか。それとも開設当初から本四国霊場とは大きく異なる、独自の巡礼形態をとっていたのか。こうような内容について言及した。

文化13年よりも後に起きた安政地震火事（安政２年）による被災後の状況は、浅草、下谷、本所、深川などが延焼していながら、文化13年から慶応元年までの49年間をみると札所寺院の変更・移転は、まったくみられなく、その所在地に再建復興されているのである。

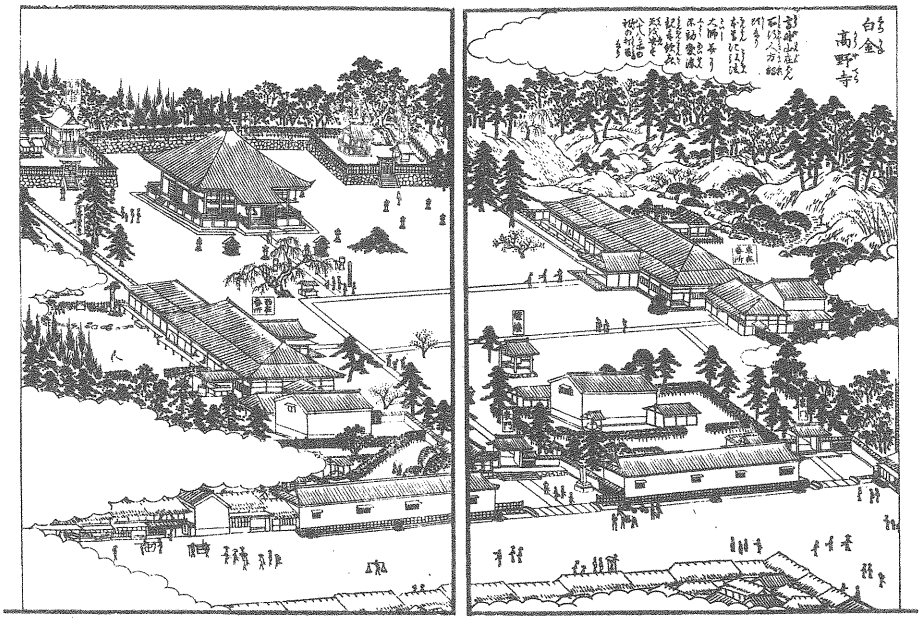


図４　「江戸名所図会」（天保７年）に記された高野寺（88番札所）

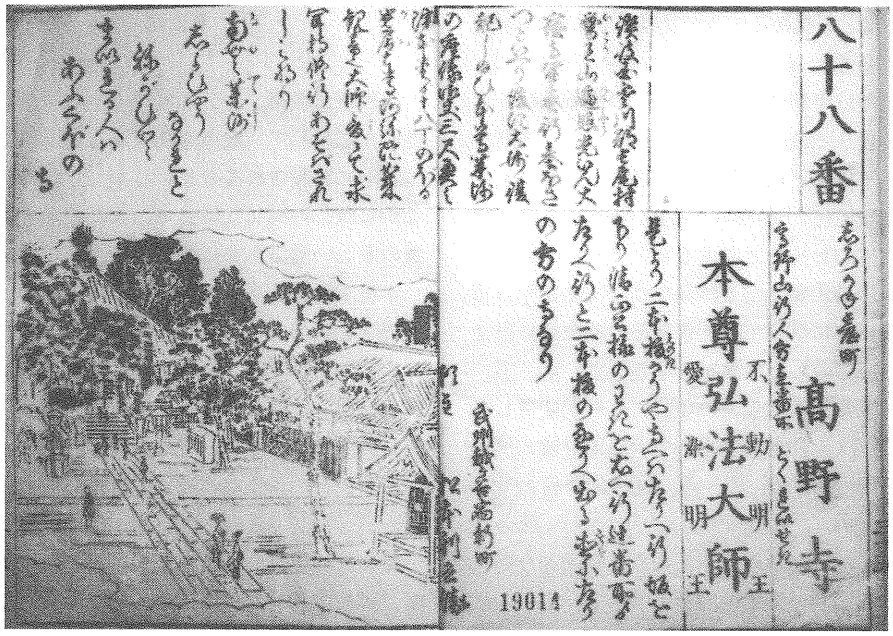


図５　「御府内八十八ヶ所道しるべ」（慶応元年）に記された高野寺（88番札所）
※図４・５は現在の文殊院に名称変更移転する以前の寺院名

このことは開設当初の宝暦５年以降、文化13年までにおいても同様に、順番通りの巡拝道ではなかったように推察できた。

しかし明治初期の11年という短期間（慶応元年から明治９年）のうちに19ヶ寺もの寺院変動（全体の22パーセント）がみられることは、神仏分離令（廃仏毀釈）の影響があったものと考えられる。更に、この神仏分離令による19ヶ寺を含めた、明治初期から現在までの札所変更・移転が31ヶ寺も存在していることを確認した。この31ヶ寺に加えて、関東大震災や戦災などによって焼失・被災した札所寺院を含めると、全寺院の実に84パーセント（74ヶ寺）にも達しているのである。

換言すると、宝暦５年に開設された「御府内八十八ヶ所霊場」が、たびかさなる江戸の大火によって寺院の焼失などを受けながらも、江戸時代においては、その都度再建されて札所を維持してきたと考えられる。それに対して、明治以降（慶応元年以降）においては宗教政策、震災、戦災などによって31ヶ寺の寺院変更や郊外への移転が認められた。

なお、開設当初における１番から88番という札所番号設定に関しては容易に解明できなく、今後の課題にしたい。

注と引用・参考文献

(1)　田中智彦：「巡礼と寺社参詣」『神と霊魂の民俗』講座日本の民俗学７　雄山閣　平成９年　頁122

(2)　新四国霊場や巡礼に関する主な研究には、以下のような報告がある。

a・籾山智美：「近代における知多新四国巡礼の盛況」『知多半島の歴史と現在』№10　日本福祉大学知多半島総合研究所　校倉書房　1999年

b・松田雅子：「本四国霊場に対する新四国霊場の模倣形態と実際ー知多四国霊場をフィールドとして」名古屋大学人文科学研究　第34号　2005年

c・川添崇：「壱岐四国八十八ヶ所巡礼について」仏教と民俗　16　昭和55年

d・中山和久：「巡礼と行場の関係ー篠栗新四国霊場を中心としてー」日本山岳修験学会　山岳修験第25号　2000年

e・小田匡保：「小豆島における写し霊場の成立」人文地理　第36巻４号　1984年

f・田中博：『巡礼地の世界ー四国八十八ヶ所と甲山新四国八十八ヶ所の地誌』古今書院　1983年

g・後藤洋文：「関東地方の新四国霊場」仏教と民俗16　昭和55年

h・後藤洋文：「送り大師」考　大正大学大学院研究論集　第２号　昭和53年

i・小嶋博巳：「利根川下流域の新四国巡礼ーいわゆる地方巡礼の理解に向けてー」成城大学文芸学部成城文藝　第113・114号　1985年

j・小林団：「東葛印旛大師講の変容ー千葉県北部の新四国霊場に見られる事例としてー」東洋大学大学院紀要　第38集　平成14年

k・前掲(1)

l・新城常三：「近世に於る地方霊場の発達ー新西国と新四国ー」民俗学研究紀要　第５集　成城大学民俗学研究所　昭和56年

m・星野英紀：「大都会の新四国霊場ー御府内八十八ヶ所霊場の実態ー」大正大学宗教学会　宗教学年報25　2005年

n・多文化社会研究会：『四国遍路と世界の巡礼』愛媛大学公開講座　2001年

o・近藤喜博著：『四国遍路研究』三弥井書店　昭和57年　頁282～302

(3)　前掲(1) 頁122

(4)　前掲(2)－ｇ　頁17

(5)　前掲(2)－ｌ　頁172

(6)　この他、前掲(2)－ｇによれば、「南葛弘山講八十八ヶ所霊場」（明治43年開設）、「東葛西領八十八ヶ所霊場」（天明年間開設）、「荒綾八十八ヶ所霊場」（開設年代不明）、「武王新四国霊場」（文政６年開設）、「三郡八十八ヶ所霊場」（明治17年開設）、「四ヶ領八十八ヶ所霊場」（天保12年開設）などがある。

(7)　拙稿：「都内の四国霊場」文化愛媛№31　1992年　頁32～33

(8)　台東区教育委員会：『御府内八十八ヶ所大意』版木（台東区文化財報告書　第23集）　平成９年

(9)　拙著：『江戸・東京のなかの伊予』愛媛県文化振興財団　えひめブックス24　平成15年　頁２～４

(10)　日塔和彦：「『御府内寺社備考』からみた江戸の寺院」年報 都市史研究第６号　1998年　頁９の第６表参照

(11)　前掲(2)－ｍ　頁３

(12)　前掲(2)－ｌ　頁172

(13)　之潮編集部：『明暦江戸大絵図』之潮　2007年１月

(14)　拙稿：「東京でおへんろ」文化愛媛№57　2006年　頁28～30

(15)　札所番号は江戸時代においては曖昧だったのか、資料によって一部変動もみられる。それについて、江戸町名俚俗研究会：『地方図特集（四）』昭和42年７頁によれば「活字本には、明らかな誤番もあり、たとえば本所弥勒寺と大徳院など表に依り番号が取り違っている。その時代によって変わったのか、寺で相談の上取替たかわからない。」とあるように、資料によっては記載が異なる場合（例えば『東都歳時記』）がある。

(16)　寂本原著・村上護訳：『四国徧礼霊場記』教育社新

書　1987年　頁38

⑰　十返舎一九著：『金草鞋　第十五編』十返舎一九全集　日本図書センター　昭和54年　頁558

⑱　前掲(2)－d　頁68

⑲　佐藤久光著：『遍路と巡礼の社会学』人文書院　2004年　頁66

⑳　前掲⑲頁68

㉑　武田明著：『巡礼と遍路』三省堂　三省堂選書58　1979年　頁4

㉒　前掲㉑頁７

㉓　寺町では札所が密集しているため巡拝が前後することによる変化である。

㉔　88番札所は、大正９年（1920）まで港区白金台町にあって、「白銀高野寺」と呼ばれていたが、その後、杉並区和泉へ移転してからは院号の「文殊院」で呼ばれるようになった。

㉕　札所が他の寺院へ変更したケースや寺院が焼失・被災した後、所在地を移転させたケースとは異なり、関東大震災や昭和の戦災などによって寺院が焼失・被災したものの、その後その場所で復興・再建した札所寺院。